

Nara National Museum

奈良国立博物館

だより

第 **102** 号

平成29年 7・8・9月



©阿弥陀如来立像及び厨子（新長谷寺）

特別展

1000年忌特別展

源 信

地獄・極楽への扉

7月15日(土)~9月3日(日)

東・西新館

名品展

珠玉の仏たち

通期開催

なら仏像館

名品展

中国古代青銅器

通期開催

※臨時休館7月31日(月)~8月10日(木)

青銅器館

特別展

一〇〇〇年忌特別展

源 信 地獄・極楽への扉

7月15日(土)～9月3日(日)

恵心僧都源信(九四二～一〇一七)は奈良で生まれ、比叡山で修行を積んだ平安時代の僧侶です。源信は死後阿弥陀如来の来迎を受けて、極楽浄土へ生まれることを願う、浄土信仰を広めた僧として知られます。誰にでも理解しやすい地獄と極楽の世界を描き出した『往生要集』などによって源信が示した具体的な死後の世界のイメージは、後世へも多大な影響を及ぼしました。

本展は平成二十八年に迎えた源信の一〇〇〇年忌を記念し、源信の足跡をたどるとともに、後世に与えた影響の大きさを、関連の仏教美術によって示す特別展です。地獄絵を含む六道絵や阿弥陀来迎図の名品が一堂に会する本展を通じて、死後の世界へのイマジネーションを体感していただくとともに、真摯に死と向き合った名僧の姿に思いを馳せていただければ幸いです。

展示は前期(7月15日～8月6日)、後期(8月8日～9月3日)で絵画と文書を中心に大きな展示替があります。後期には、地獄草紙(国宝、奈良国立博物館所蔵)や餓鬼草紙(国宝、東京国立博物館 ※8月8日～8月20日展示)といった絵巻、山越阿弥陀図(重文、京都・金戒光明寺所蔵)や高野山の阿弥陀聖衆来迎図(国宝、和歌山・有志八幡講 ※8月22日～9月3日展示)といった名品が揃います。ぜひ展示替予定をご確認の上お越しください。



恵心僧都源信像 (聖衆来迎寺)
※前期(7/15～8/6)展示



●地獄極楽図屏風 (金戒光明寺)
※後期(8/8～9/3)展示



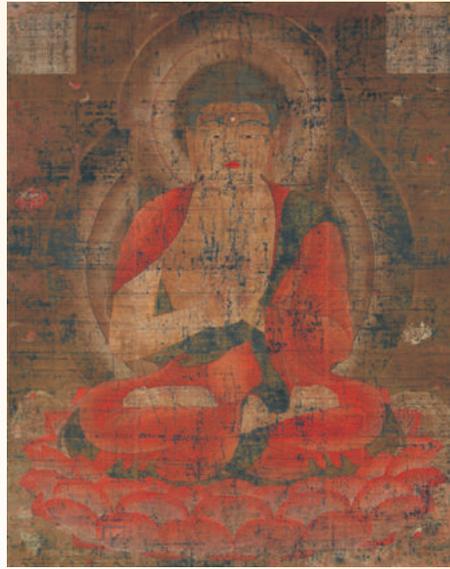
●山越阿弥陀図 (金戒光明寺)
※後期(8/8～9/3)展示



●餓鬼草紙[部分] (東京国立博物館)
※8/8～8/20展示



●地獄草紙[部分] (奈良国立博物館)
※後期(8/8～9/3)展示



◎阿弥陀三尊及び童子像（法華寺）
※7/15～8/20展示



◎阿弥陀如来及び観音・勢至菩薩坐像（保安寺）/地蔵・龍樹菩薩坐像（奈良国立博物館）



◎六道絵のうち等活地獄・阿鼻地獄（聖衆來迎寺）
※前期(7/15～8/6)全15幅すべて展示



◎地蔵菩薩立像及び厨子（東大寺知足院）
※8/1～9/3展示

奈良へ赴任して

奈良国立博物館長 松本 伸之



長年、当館の舵取りを担ってこられた湯山賢一前館長の後をうけ、この四月に館長に就任しました。神社仏閣をはじめ、関係各方面へ就任のご挨拶を重ねるうち、瞬く間に数ヶ月が経過したというのが実感です。

私にとりましては、奈良の地には格別な思いがありません。というのも、私の修士論文のテーマが東大寺大仏の蓮弁線刻画に関するもので、その骨子を東大寺（南都仏教研究会）の機関誌である『南都仏教』に掲載していただき、研究者としての第一歩を踏み出すことができたからです。

それとほぼ時を同じくして、大阪の和泉市久保惣記念美術館に併設された東洋美術研究所に職を得て、学芸員生活をスタートしました。以来、東京国立博物館、京都国立博物館、そして奈良国立博物館へと籍を移しながら、三十数年間にわたって博物館界に身を置き、その間、日本各地はもとより、アジア、アメリカ、ヨーロッパの様々な地域で博物館・美術館や遺跡などを訪れて文化財や博物館学の調査研究に携わり、同時に国内外で催される数多くの展覧会に関わってきました。

いま振り返ると、こうした数多くの得がたい経験を積めるようになった端緒が奈良の文化をテーマとする研究にあったことに、感慨ひとしおのものがあります。

この奈良に国立博物館が設置されたのは、いまから一三〇年近く前、明治二十二年（一八八九）のことです。当時の宮内省が所管した「帝國奈良博物館」です。その後、明治二十八（一八九五）年に開館、以来、仏教（ないし宗教）文化に関する文化財の収集・保管・展示・調査研究を行うことを主眼として運営を続けてきています。仏教文化・美術といえは奈良である、という概念が近代国家の草創期から根付いていて、それが現代まで脈々と受け継がれてきたといえるでしょう。

奈良へ赴任して改めて感じるのは、このような仏教文化を通して見える国際性とい

う点です。神話の時代はさておき、仏教が伝来して日本の国家が建設途上にあつた時代には、中国大陸や朝鮮半島からもたらされた文化が国作りの一つの範とされ、たくさんの渡来人がその過程で中心的な役割を担ってきました。国境を越えた多様な文化交流を軸としながら国作りが行われていったわけですね。

そうして形作られた国家の体裁や組織、思想、宗教、生活様式、さらに建造物から書画、工芸、調度、日用品に至るまで、国際色に溢れていたのはむしろ当然のことといえるでしょう。そして、そのいわば頂点に当たる奈良時代に形成された天平文化は、近代以前の日本において、ある意味、最も国際色に富んだものといっても過言ではありません。その代表が、仏教文化にはほかなりません。

現在の奈良市一帯でも、諸寺に伝わる天平彫刻群、幾多の社寺の壮麗な建造物、さらに正倉院の多彩で華麗をきわめた宝物の数々など――どれをとっても当時の国際性を色濃く反映した超一級の文化遺産です。

仏教文化を基軸として、これらの多彩で貴重この上ない文化の総体に向き合いながら、その価値や意義を掘り下げていくのも奈良国立博物館に課された使命の一つといえるかと思えます。もちろん、奈良時代以前あるいはそれ以降における文化史の展開なども視野に入れておかなければなりません。

奈良国立博物館では、年に数回ずつ、特定のテーマを設定した特別展や特別陳列を開催するとともに、昨年リニューアルした「なら仏像館」において、「珠玉の仏たち」と題して、傑出した出来映えを見せる仏像の優品を、時々の展示替えを交えながら、常時展覧しています。同時に、類い稀な文化財の数々を適切に収集・管理し、それらの保存・修復を着実に進めていくという地道な事業にも日々取り組んでいます。

予算や人員の上でたいへん厳しい局面が続く昨今の情勢にあつて、博物館の基幹事業を途絶えることなく推し進め、さらに新たな一步を積み重ねていけるよう、奈良という地の伝統を改めて噛みしめながら、多角的な視点を持って博物館の運営に取り組んでいかなくてはならないことを痛感するこの頃です。



なら仏像館外観

「快慶 日本人を魅了した仏のかたち」展に寄せて

東北大学大学院文学研究科教授 長岡 龍作

「快慶 日本人を魅了した仏のかたち」展を見た。展覧会には二度行ったが、最初に見終えたとき、なにかとても心地よいものを見たという気分になった。仏像の展覧会でそういう気分になることは少ない。仏像の研究を仕事にしている身ではあるが、仏像とはよいものだなあとしみじみ思ったりもした。

日本の仏像の歴史を概観すると、仏師の名前が知られることは、平安時代以前にはほとんどない。造像に伴い伝えられるのは施主の名前だけである。平安時代後期に康尚と定朝が登場して以降、造像は仏師の名前とともに語られ始めるようになる。当初仏像にとって重要な人間は施主だけだったが、後に仏師の存在が大きくなったのだ。では、そうなったのはなぜなのだろう。快慶は、そうした問題を考える上でもキーとなる仏師である。

展覧会は、快慶の生涯の各場面を、活躍した場と施主となった人々との関わりを軸に分類し、それぞれにおける快慶の活動と仏像の特色を七章から紹介している。

第一章「後白河院との出会い」では、快慶の活動の始まりが、後白河院との出会いにあったことを紹介する。近年、快慶が名乗った「巧匠」という肩書きは、仏典に登場する「天匠」毘首羯磨天を意識したものであり、それは、後白河院の命によって快慶が清涼寺釈迦如来像を模したことに由来するという重要な指摘がなされた。展覧会の冒頭に展示される醍醐寺弥勒菩薩像は、初めて快慶を「巧匠阿弥陀仏」と称した作例だ。像内の建久三年（一九二）の年紀から、同年に崩御した

後白河院の追善を目的として造られたと考えられている。会場のスポットライトは、この像の玉眼を巧妙に光らせ、像の生気を否が応でも高めていた。「巧匠」に期待されたものが、仏像を生きたものにするにすぎなかったことを実感できる展示だった。

第二章「飛躍の舞台へ―東大寺再興―」では、重源との交流の中でおこなわれた、東大寺ほかの造像が紹介される。快慶造像のハイライトというべき活動だ。モニユメンタルな巨大仏はなくても、浄土寺裸形阿弥陀如来像、高野山の四天王像や孔雀明王像、東大寺僧形八幡神像の展示からは、この舞台での快慶の活動の充実ぶりが尋常でないことはよく伝わってくる。第三章「東国への進出」は、快慶の展覧会としては意表を突く切り口だろう。東国との関わりは運慶にふさわしいが、伊豆山との関係から、快慶にも東国とのつながりのあったことが浮かび上がる。第四章「勸進のかたち―結縁合力による造像―」では、快慶が生涯に多数造った三尺阿弥陀如来像の内側が探られる。遣迎院阿弥陀如来像は一万二千人の結縁者を伴う像だ。像内に納められた人名の多さは、結果的に像自体の聖性を高める。仏像に多くの信心が薫じ込まれることになるからだ。「巧匠」の仏像は、内側からも支えられている様相が浮かび上がる。第五章「御願を担う―朝廷・門跡寺院の造像―」は、東大寺再興を終えた快慶が、青蓮院を舞台に新しい活動を始めたことが紹介される。なかでも青蓮院兜跋毘沙門天像は、快慶には珍しい尊種であり、かつてメトロポリタン美術館不動明王像と一具をなした可能性も示唆されていて興味深い。

第六章「霊像の再生―長谷寺本尊再興―」は、「巧匠」快慶だからこそなし得たに違いない、稀代の霊像、長谷寺十一面観音像の再興事業が紹介される。建保七年（一一一九）のこの事業の一年前、快慶は清涼寺釈迦如来像の修理もおこなっている。快慶が特別な仏師だった様相が、随所に立ち現れる。第七章「安阿弥様の追求」では、再び三尺阿弥陀如来像が取り上げられる。快慶は生涯三尺阿弥陀如来像を作り続けたが、その契機もまた後白河院の追善事業にあった可能性が示される。それにしても、快慶作とわかる仏像の数は他の仏師を圧倒している。一人の仏師の様式変化をこのように克明に追える例は他にない以上、この章は、もつとも快慶にふさわしい展示として楽しめる。

仏像を造ることは作善なので、造像は結果的に施主の願いを叶える。そのために、施主はよい仏像を造りたいと考える。よい仏像を生む仕組みは時代により変化するが、よい仏師こそがよい仏像を造り得るという考え方が生じた時、仏師の名前は歴史の表舞台に登場する。この展覧会は「如法」をキーワードに据えて快慶を捉えている。信心を保ち斎戒をおこなうことが「如法」である。それゆえに快慶は「人間の巧匠」になったという見方は、仏師という存在の本質を突いている。本展は、そのような希有な仏師の全貌を紹介するものであり、それを見事に成功させた展覧会と言っている。



醍醐寺弥勒菩薩像に見入る観覧者

出陳一覽

名品展

珠玉の仏たち

なら仏像館

〔彫刻〕

〔第1室〕
大将軍神坐像

当館 (7月2日まで展示)

如来立像

当館 (7月4日から展示)

蔵王権現立像

当館 (7月2日まで展示)

地藏・龍樹菩薩坐像

当館 (7月2日まで展示)

広目天立像

当館 (7月4日から展示)

伽藍神立像

当館 (7月4日から展示)

毘沙門天立像

当館

南無仏太子立像

当館



伽藍神立像 当館

〔第2室〕

獅子

獅子

観音菩薩立像

観音菩薩立像

観音菩薩立像

〔第3室〕

阿弥陀如来坐像

宝冠阿弥陀如来坐像

阿弥陀如来坐像

当館

当館

文化庁

本山寺

細見美術財団

当館

安楽寿院

善福寺

〔第4室〕

菩薩坐像

侍者坐像

天部坐像

薬師如来坐像

薬師如来坐像

薬師如来坐像

文殊菩薩坐像

如来立像

誕生釈迦仏立像

誕生釈迦仏立像

誕生釈迦仏立像

如来立像

菩薩立像

菩薩半跏像

観音菩薩立像

観音菩薩立像

観音菩薩立像

二仏並坐像

誕生釈迦仏立像

観音菩薩立像

十一面観音菩薩立像

力士立像

力士立像

如来立像

如来立像

釈迦如来坐像

薬師如来坐像

大威徳明王騎牛像

不動明王立像

勢至菩薩立像

阿弥陀如来立像(裸形)

釈迦如来立像

獅子

如来三尊像

如来三尊像

如来三尊像

如来三尊像

当館

個人

個人

当館

見徳寺

当館 (9月10日まで展示)

当館 (9月12日から展示)

薬師寺

新薬師寺

正眼寺

悟真寺

当館

法起寺

神野寺

法隆寺

観心寺

金剛寺

当館

個人

個人

個人

個人

個人

個人

光明寺

当館

園城寺

文化庁

当館

当館

当館

浄土寺

法明寺

個人

個人

個人

個人

如来三尊像

天部立像

如来立像

阿弥陀如来坐像

宝冠阿弥陀如来坐像

如意輪観音菩薩坐像

如来三尊像

個人

兵庫県

当館

薬師寺

当館

8月5日(土) 「浄土の造形—源信以後を中心に—」
武笠 朗氏(実践女子大学教授)

8月19日(土) 「『往生要集』の成立—天台浄土教と源信の信心—」
小原 仁氏(聖心女子大学名誉教授)

9月2日(土) 「源信と浄土信仰の美術」
北澤 菜月(当館学芸部主任研究員)

【時 間】 各回とも13:30~15:00(13:00開場)
【会 場】 当館講堂
【定 員】 194名(先着順)

- * 聴講無料(聴講には入場整理券が必要です)
- * 12:00から当館講堂前にて入場整理券(お1人様につき1枚)を配付します。
- * 入場整理券の受取の際には本展の観覧券もしくはその半券、国立博物館パスポート、奈良博プレミアムカード等をご提示ください。
- * 入場受付は講座開始後30分で終了します。

❖ サンデートーク❖

美術や歴史のこと、博物館の活動など、当館ならではの多彩なテーマ、日頃聞くことの出来ない「通(つう)」なお話をご用意して、皆様をお待ちしております。どうぞお気軽にご参加下さい。

■7月16日(日) 「春日野の星」
清水 健(当館学芸部工芸考古室長)
星占いでおなじみの十二星座は、実は日本の古美術の中にも時折顔を出します。今回は当館の所蔵する春日龍珠箱に表された十二星座(宮)について、その信仰や図像に迫ります。

■8月20日(日) 「道宣と元照～その肖像画制作について～」
伊藤 久美(当館学芸部研究員)
中国の律宗の一派、南山宗を開いた道宣(596~667)と、それを復興した元照(1048~1116)。鎌倉時代以降、この二人の肖像画が奈良を中心にいくつも作られました。その制作背景や絵の特徴を紹介します。

■9月17日(日) 「中国河南省の石窟寺院を訪ねて」
岩井 共二(当館学芸部情報サービス室長)
中国河南省には、洛陽の龍門石窟をはじめとして、中国仏教美術史上重要な石窟寺院があります。今回は河南省にある石窟の仏像から、北魏6世紀の名品を中心に紹介していきます。

■10月15日(日) 「春日塔跡の散策」
吉澤 悟(当館学芸部列品室長)
平安時代、春日の神様に二つの仏塔が捧げられました。奈良国立博物館の敷地に遺るこの春日塔跡を、現地散策しながら解説します。集合場所は講堂。大雨の場合は講堂内で解説します。

■11月19日(日) 「文化財を科学するⅣ」
鳥越 俊行(当館学芸部保存修理指導室長)
当館では、文化財の健康診断に役立つ最新のX線CTスキャナを導入しました。どのようなことが分かるのか、また何に役立つのかなど事例を元にご紹介します。

■12月17日(日) 「欧米で出会った日本彫刻あれこれ」
岩田 茂樹(当館上席研究員)
美術品は旅をすることがあります。なかには数奇な運命をたどり、海外の美術館の所蔵品となったものも。今回は、私が欧米で出会った日本彫刻のなかから、これまであまり紹介されていない作品について報告いたします。

【時 間】 各回とも14:00~15:30(13:30開場)
【会 場】 当館講堂
【定 員】 194名(先着順)

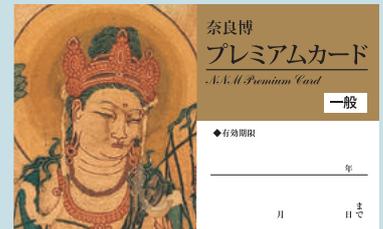
- * 聴講無料(聴講には入場整理券が必要です)
- * 12:30から当館講堂前にて入場整理券(お1人様につき1枚)を配付します。
- * 入場受付はトーク開始後30分で終了します。

■特別展「源信」子ども無料日
7月29日(土)・30日(日)は子ども無料日です。中学生以下の方はどなたでも無料で源信展を観覧できます。同伴の方は団体料金で観覧していただけます。

■特別展「源信」子ども無料日イベント
□親子講座「エンマさまと地獄めぐり」
地獄絵研究の第一人者・鷹巣先生がエンマ大王にふんして、こわ〜い地獄絵の世界を楽しくご案内いたします。
日 時：7月29日(土) ①11:00~11:45 ②13:00~13:45
会 場：当館講堂
講 師：鷹巣 純氏(愛知教育大学教授)
対 象：小・中学生とその保護者
定 員：各回40組80名(事前申込み・先着順)
参加費：無料(参加には保護者の方の本展観覧券(半券可)又は奈良博プレミアムカード等のご提示が必要です。)
主 催：奈良国立博物館
申込方法：
当館ホームページ <http://www.narahaku.go.jp>
専用の申込み画面より必要事項をご入力の上、お申込みください。

◆新制度「奈良博プレミアムカード」
「国立博物館メンバーズパス」販売開始のお知らせ

平成29年4月1日(土)より、当館を今まで以上に楽しみたいだけの新制度「奈良博プレミアムカード」「国立博物館メンバーズパス」を販売しております。
詳しい情報は、当館ホームページをご覧ください。当館観覧券売場又は総務課企画推進係(TEL:0742-22-4450 ※祝日を除く月曜日~金曜日の午前9時から午後5時まで)へお問い合わせください。



◆奈良国立博物館賛助会
平成29年6月30日現在、一般会員(個人)53名、一般会員(団体)15名、特別会員3団体、特別支援会員4団体のご入会をいただいております。
[一般会員(個人)] 武藤 恵里 様(平成29年4月ご入会)
馬場 義夫 様(平成29年5月ご入会)

◆キャンパスメンバーズ
平成29年6月30日現在、「キャンパスメンバーズ」会員の大学等は以下の通りです。
大阪大学・関西大学・関西大学第一高等学校・関西大学北陽高等学校・関西大学高等部、京都外国語大学・京都外国語短期大学、京都教育大学・京都教育大学附属高等学校、京都工芸繊維大学、京都女子大学・京都女子高等学校、京都精華大学、京都大学、京都橘大学、近畿大学文芸学部・近畿大学大学院総合文化研究科、嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学、四天王寺大学人文・社会学部、就実大学人文科学部、帝塚山大学、天理大学、同志社大学・同志社女子大学・同志社高等学校・同志社香里高等学校・同志社女子高等学校・同志社国際高等学校、奈良学園大学・奈良文化女子短期大学部・奈良文化高等学校・奈良学園高等学校・奈良学園登美ヶ丘高等学校、奈良教育大学、奈良県立大学、奈良工業高等専門学校、奈良佐保短期大学、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、奈良大学、佛教大学、立命館大学・立命館大学大学院、龍谷大学・龍谷大学短期大学
(以上、五十音順)

展示品の
みどころ



宝蔵菩薩



日照王菩薩

にじゅうご ぼさつ ざぞう
二十五菩薩坐像のうち

ほうぞう ぼさつ
宝蔵菩薩 (右6号像)

にっしやうおう ぼさつ
日照王菩薩 (右4号像)

重要文化財
木造 彩色・鍍金
宝蔵菩薩 像高83.9cm
(展示期間 7/15-8/6)
日照王菩薩 像高84.1cm
(展示期間 8/8-9/3)
平安時代(11世紀)
京都 即成院

えしんそう ずげんしん おうじやうようしやう
恵心僧都源信が著した『往生要集』は、極楽浄土への往生を遂げるための実践法を説いた書である。その核心となる実践法が「観想念仏」である。これは、念仏とか修行というより、「イメージトレーニング」と言った方が現代人にはわかりやすいだろう。阿弥陀如来の姿をひたすら心に描き、臨終の際には、阿弥陀さまとともにたくさんの菩薩たちが楽器を奏でながらお迎えに来てくださるように、日頃からその様子をイメージトレーニングしておくのである。

「では、どうしたら仏の姿を思い描けるのか?」「仏像を造って拝めばよい!」平安時代の11世紀から12世紀にかけて、一大仏像制作ブームが起きたのは、こうした考え方が流布したからであろう。そして極楽往生を願う信仰の背景には『往生要集』に説かれた地獄の恐怖というものが大いに影響していたと思われる。

京都・即成院に伝えられる阿弥陀如来及び二十五菩薩坐像は、こうした時代背景のもとで造られた。阿弥陀如来が多く菩薩を従えて来迎する様子を、立体的な彫刻群像として表したものである。現在、二十五菩薩像のうち、10体が平安時代の造立当初の像で、そのうちの6体が源信展に出陳される(前期に3体、後期に3体)。来迎図の絵の中から出てきたような優美さだけでなく、的確な量感と質感をそなえた人体表現がなされている。当時の一流の仏師によって制作されたものであろう。

(岩井 共二 当館学芸部情報サービス室長)

◆1000年忌特別展「源信 地獄・極楽への扉」にて展示

開館日時(7月~9月)

■開館時間 / 午前9時30分~午後5時

特別展「源信」会期中は午後6時まで、
特別展「源信」は金・土曜日と8月6日(日)~15日(火)は午後7時まで、
名品展は金・土曜日は午後8時まで、8月5日(土)、11日(金・祝)、
12日(土)は午後9時まで
※いずれも入館は閉館の30分前まで

■休館日 / 毎週月曜日

ただし、7月17日、8月14日、9月18日は開館し、7月18日(火)、
9月19日(火)は休館
青銅器館は、7月31日から8月10日まで展示替えのため休館

★無料観覧日(名品展のみ) / 9月18日(敬老の日)

★子ども無料観覧日 / 7月29日・30日

小・中学生無料、同伴の保護者は団体料金で観覧できます。

■観覧料金 特別展「源信」

	一般	高校・大学生	小・中学生
個人(当日)	1500円	900円	500円
団体・前売	1300円	700円	300円

※団体は20名以上です。 ※前売券の販売は7月14日(金)まで。
※障害者手帳をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料です。
※この料金で、名品展(なら仏像館・青銅器館)も観覧できます。
※奈良国立博物館キャンパスメンバーズ加盟校の学生の方は、当日券を400円でお求めいただけます。

■観覧料金 名品展

	一般	大学生	高校生以下
個人	520円	260円	無料
団体	410円	210円	無料

※団体は20名以上です。
※高校生以下および18歳未満の方、満70歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料です。
※奈良国立博物館キャンパスメンバーズ加盟校の学生の方は無料です。
※毎月22日にご夫婦で観覧される方は、各半額になります。
※中学生以下の方と一緒に観覧される方は、団体料金を適用します(子どもといっしょ割引)。
※夏休み(7-8月)中、開館時間延長日の午後5時以降に観覧される方は、団体料金を適用します(レイト割引)。



●バス停

[交通案内] 近鉄奈良駅下車徒歩約15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス(外回り)「氷室神社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用ください。